

電気のふるさと

電源地域ニュース

● 特集 電源地域のサクセスストーリー

美しい風景と人の交流でまちおこし

生き生き輝く未来をとらえた「写真の町」

北海道 東川町





北海道 東川町「旭岳」

電気のふるさと

電源地域ニュース

C O N T E N T S

● Key Person..... 2

経済産業省 資源エネルギー庁 電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課
原子力発電立地対策・広報室長
鈴木 洋一郎

● 特集 電源地域のサクセスストーリー..... 4

美しい風景と人の交流でまちおこし
生き生き輝く未来をとらえた「写真の町」
北海道 東川町

● いきいき 電源地域..... 10

地域振興に取り組んでいる電源地域の元気な姿を紹介します
愛媛県 伊方町
福井県 おおい町

● センター掲示板..... 11

電気のふるさと 産品自慢

富有柿ジャム 岐阜県 本巣市
紫黒米あれこれ 兵庫県 たつの市

- 「電気のふるさとじまん市」がネットモールに出店します！..... 12
- あなたの地域の担い手づくり最近の研修事業から..... 13
- 「エネルギープラザ2006 in 玄海町」開催のお知らせ..... 14
- (財)電源地域振興センターの組織が変わりました..... 14
- 読者プレゼント..... 15
- 人事往来..... 15
- 編集後記..... 15

電源地域探訪 ～表紙のことば～

東川町の背景にどっしりと横たわる大雪山連峰。その主峰「旭岳」には手つかずの自然が広がり、温泉観光客やカメラマン、スキーファン、登山者たちの羨望の的となっています。一方、視線を近くに移すと、そこには美しい田園やまっすぐに伸びた道など、北海道らしいのびやかな風景が広がっており、さらに街の中には景観に配慮した住宅や木彫看板、そして人々の笑顔が溢れ、山の魅力に勝るとも劣らない生活資源がそこにはあります。

大雪山と忠別川の恵みに抱かれた東川町で生産される農産物はまさに自然と住む人々の「共同作品」であり、今後も多くの人々を魅了することでしょう。

表紙：新忠別発電所（北海道電力、水力：国の重要電源開発地点指定）最大出力：1万kW

営業運転開始（予定）：平成18年10月

Key Person



経済産業省 資源エネルギー庁 電力・ガス事業部
原子力立地・核燃料サイクル産業課
原子力発電立地対策・広報室長
鈴木 洋一郎

昨今、地域振興をめぐる地方や地方自治体を取り巻く環境は大きく変わりつつあります。従来の地域振興策の多くは、自治体が国の施策メニューを選びその通り実行することによって補助金の受け皿になり、これを地域に配分するというものでした。域内での箇所付けが地域をグリップする源泉になってきました。国の施策を下請け的に実施してきた結果、この地方に行っても総じて金太郎飴のような内容で、地域毎の特色や工夫の余地は残念ながら余り見られませんでした。ここ数年、三位一体の改革が進み、地域振興策の多くは国が自治体を通り越して直接事業者を対象とするようになり、内容も従来のメニュー提示型から地方の発意と工夫に基づくモデル重視型となりました。自治体を経由しないことにより、従来の自治体による配分機能は消失しました。今では地方が自らの頭と手で考え積極的に国に提案することでお仕着せでない地域の実情に即した地域振興を実現することが可能となつてきています。勿論、従来も建前はそうでした。が、カネとアイデアで地方の自由度が増し、地域間競争が激しくなっています。構造改革特区制度の導入もこれを後押ししまし

た。市町村合併が進み、優勝劣敗が明確になってきたことも背景にあります。実際、多くの自治体では三位一体改革で移譲された自主財源や特区制度を有効に活用しようと知恵を絞っています。私の前職は地方の県庁勤務でしたが、地域振興の難しさは肌身に染みんでいます。激化する国際競争と企業のコスト意識の高まりで企業誘致は思うように進まず、むしろ企業流出を阻止するのに必死です。内発型の産業振興を目指して起業・業務拡大を支援しても、研究開発段階で資金繰りに詰まってしまう、補助金が切れるとその後が続かない、地場産品を開発しても販路が無い、と途中で頓挫することしきりです。そんな中、いくつかの成功例もありました。例えば野菜の産直ですが、生産者や生産履歴を明示する、販売情報をリアルタイムで生産者に伝達し商品補充を直ちに行う、豊富な品揃えと広い駐車場を設ける、都市部にサテライト的に店舗を設ける、といった工夫で売上げを伸ばしたものの、町並みの良さを見てもらう観光イベントで、パビリオンなどハード施設は無いものの、複数の町が競い、半年もの長期間を設定し、多くの地元住民が主体となって町全

体をイベント会場とするような様々な体験型プログラムを演出したものが、これは多くの観光客を集めイベント関係の全国的な賞も頂きました。成功例のポイントは、
①顧客ニーズを的確にとらえていること
②事業に携わる関係者が十分な動機付けをもち関係者が価値を認める見返りがあること
③地域の利点や資源を分析し活用すること
④核となる人物がいること
などが挙げられます。いずれも言い尽くされている点ですが、どうかこれらの点も参考にしながら皆さんの地域それぞれで工夫をこらし、持続可能な地域振興に取り組んで頂ければと思います。国は多くの交付金制度や地域振興策をもっていますので、これらも有効にご活用頂きたいと思えます。電源地域をめぐる現状は様々です。「他がこうして成功したから」「○○で評判が良いから」ということでは無く、過疎や来るべき少子高齢化を見据え、住民が真に求めることを実現して頂きたいと思えます。そのための御支援は惜しみませんし、御要望には出来る限りお応えしたいと考えています。

美しい風景と人の交流で町おこし

Pick Up

北海道 東川町

生き生き輝く未来をとらえた「写真の町」

北海道東川町は、雄大な大雪山国立公園を有する美しい自然に恵まれた町で、二つの温泉を拠点とした観光、稲作を中心とする農業、そして高品質な家具を生産する木工業で知られてきました。しかし昭和六十年、これらの産業に陰りが見え始めたのをきっかけに、町は全国に向かつて「写真の町」を宣言。写真映りのよい人・環境・物づくりをめざしてユニークな活動をスタートさせました。今回は、「一村一品」に代わる、「一村一文化」によってまちおこしに取り組んでいる事例として、粘り強く「写真の町」づくりを推進し、ついに全国にその名を知られるまでになった東川町にスポットを当てました。



お問い合わせ先
東川町役場 企画総務課 TEL 0166-82-2111
http://www.town.higashikawa.hokkaido.jp/

大雪山国立公園を抱える美しいまち東川町

東川町は、北海道のほぼ中央部に位置し、大雪山国立公園の雄大な自然に囲まれた人口約七千七百人の町です。総面積は約二百四十七平方キロメートルで、東は大雪山連峰、南は美瑛町と東神楽町、北と西は旭川市と接しています。内陸盆地にあるため、夏期は三十度、冬期はマイナス二十度を記録するほど寒暖差がはつきりしていますが、比較的冷涼で住みやすい気候です。車で旭川市から三十分、旭川空港からも車で十分と近いため、東京からでも二時間程度で東川町に到着できます。町域には、石狩川水系・忠別川を利用し

た北海道電力株式会社の新忠別発電所（国の重要電源開発地点に指定、水力・最大出力一千万ワット）が建設され、平成十八年十月から営業運転を開始する予定となっています。肥沃な土地、美しい景観、豊かな森林資源に恵まれ、昔から「お米と観光と工芸の町」として知られてきた東川町。大雪山の清らかな水と寒暖差の激しい気候に育まれるおいしい米と野菜、天人峡温泉と旭岳温泉の二つの温泉地を中心とした観光、高級伝統家具の生産地として全国的に知られる木工業が町の産業を支えてきました。また、千数年前からこれらの産業にも陰りが見え始めました。また日本の産業全体のあり方が大きく変化し、



東川町の田園風景
背景には「旭岳」を主峰とする大雪山連峰の山々が横たわる。

これから日本が世界の中でどのような役割を担うのかを問われ始めたのです。この曲がり角の時代に、東川町は未来の町の姿について考え始めました。

観光客が減っていく…町はあるべき未来像を模索

産業の陰りの象徴として、観光客の減少がありました。観光バスの乗客数が一台平均五〜六人になり、ついに定期便が休止されるまでに至りました。「観光客を増やすために、いろいろプランを検討しました。何かイベントを行えばお客さまを呼ぶことはできるだろうが、それはその場限りの「点」にすぎない。「線」となる継続性のある企画がないかと協議を重ねたのです。また昭和五十九年は、東川町に開墾の鍬がおろされて満九十年になり、十年後に町はどのような未来へを迎えるのかという未来への課題もあり、外部の企画会社

にも協力を依頼しました」と当時を振り返るのは、東川町役場・特別対策室長の山森敏晴さん。そんな中である企画会社から提案されたのが、写真の切り口とした企画だったのです。観光は「光を観る」と書き、その「光」とは景観や歴史的遺産など光り輝く価値あるもの。また現地の人の出会いの喜びも「光」である。東川町で本当に価値あるものとは何か、写真を切り口にしてそこから観光を考えていこうというものでした。「東川町には大雪山国立公園という素晴らしい被写体がある。それに観光客の誰もがカメラを持っている。写真はみんなが簡単に撮れるもので、しかも大変奥が深い。これはいい



東川町役場 特別対策室 室長 山森 敏晴さん

の整備・保全」を「物をくろう（作物や木工品）」などの基本的な指針がまとめられました。そして昭和六十年六月一日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町」宣言を行いました。写真文化によって町づくり、生活づくり、人づくりをしようという、世界でも類を見ない試みがスタートしたのです。東川町はまだ誕生して百年あまりの若い町であり、写真もまだ生まれてから百五十年の文化。長い伝統を持つ文化は古くから取り

写真が結ぶ出会いの祭典「東川町フォトフェスタ」開催

東川町は、「写真の町」宣言をした同年七月、その理念を実現するためのイベント「東川町フォトフェスタ（正式名称・東川町国際写真フェスティバル）」を開催しました。国内外の優れた写真作家を表彰する「東川賞」の授賞式を中心に、受賞作家作品展やシンポジウム、誰もが参加できるアンデパンダン展などが行われ、全国ならびに海外からたくさんの方が町を訪れました。またゲスト写真家の作品スライド上

映とジャズライブの共演、現代美術家や詩人・演劇家によるインスタレーションやパフォーマンスなど、写真と異種文化が出会う新しい試みも実施。さらに初心者を対象とした写真教室、写真による自然観察講座、町民写真展など、芸術とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広く写真文化の魅力を伝えるイベントになっています。中心となる「東川賞」は、海外作家賞、国内作家賞、新人作家賞、そして北海道と関わりのある写真家に対する特

別賞の四賞で構成されていますが、この中で海外作家賞の制定は「東川町フォトフェスタ」の海外からの注目と評価を高め、国際交流の場を生み出しました。昭和六十年に始まった「東川町フォトフェスタ」は、それから毎年夏に二カ月の会期で開催され、各種イベントに約二万人が訪れています。しかし、当初は必ずしも順調ではなかったと山森さんは振り返ります。「正直言って立ち上がりの頃は、職員も町民のみならず、写真のことやイベントの意義がよく理解できていませんでした。

Success Story

北海道 東川町 生き生き輝く未来をとらえた「写真の町」

中川町長(当時)の英断と「写真の町」を宣言

写真を切り口としたまちおこし案は、すぐに観光客が増えるなど産業振興に直接結びつくものではなかったため、役場の中でも賛否両論がありました。しかし中川町長の英断で採用が決定。「写真映りのよい町」をテーマに、写真に撮りたくなるような「人になろう（教育の振興）」「町をつくろう（環境

組む町にはかなわないが、若い文化に若い町が取り組めば、新しい伝統をつくっていきける。そんな意気込みが「写真の町」宣言には満ちています。

写真の町宣言

「自然」と「人」、「人」と「文化」、「人」と「人」それぞれの出会いの中に感動が生まれます。そのとき、それぞれの追間に風のようにカメラがあるなら、人は、その出会いを永遠に手中にし、幾多の人々に感動を与え、分かちあうことができるのです。そして、「出会い」と「写真」が結実するとき、人間を謳い、自然を讃える感動の物語がはじまり、誰もが、言葉を超越した詩人やコミュニケーションの名手に生まれかわるのです。東川町に住むわたくしたちは、その素晴らしい感動をかたちづくるために、四季折々に別世界を創造し植物や動物たちが息づく、雄大な自然環境と、風光明媚な景観を未来永劫に保ち、先人たちから受け継ぎ、共に培った、美しい風土と、豊かな心をさらに育み、この恵まれた大地に、世界の人々に開かれた町、心のこもった「写真映りのよい」町の創造をめざします。そして、今、ここに、世界に向け、東川町「写真の町」誕生を宣言します。1985年6月1日 北海道上川郡東川町



「東川町フォトフェスタ」で行われているワークショップ

た。写真は感覚的なもので、誰にでもすぐわかるわけではない。職員も写真の見方や文化を普及させようという余裕などなく、仕事を黙々とこなすだけだったというのが実情でしたね」

「住民にどんな得があるのか」など批判の声も

「写真の町」宣言と「東川町フォトフェスタ」には、当初から様々な意見がありました。中でも多かったのは、「大切な町のお金を使ってプロの写真家に賞を贈り、住民にどんな得があるのか」というものでした。確かにイベント期間中は外部から人が大勢集まって賑やかになりますが、それが直接利益につながるのはい部の商店くらいのもので、町や住民には目に見える利益がありませんでした。批判はしないまでも、「町が勝手にやっている」



東川町観光協会 会長 浜辺 啓さん

住民の声や提案を積極的に活用

「写真甲子園」とともに、平成十二年の第十五回「東川町フォトフェスタ」でのレセプション方式の変更もまた大きな転機となりました。「東川賞」の『受賞を祝う集い』では、従来町内にある店に飲食やサービスを任せていました。しかし「写真の町企画委員会」で住民たちが話し合い、この年から農家の主婦など住民の有志が料理を用意し、もてなすことになったのです。それまで「東川町フォトフェスタ」の各イベントは、ほとんどが企画会社の提案によるもので、写真愛好家



「写真甲子園」本戦は、東川町をメインステージに熱い戦いが繰り広げられる。

ほどの意識もなく、無関心な住民も多かったのです。また「写真の町」宣言をした往時は、写真関係の団体などから「写真をまちおこしの道具に使うのはけしからん」といった反発を受けました。「東川町フォトフェスタ」開催に協力を願うため、企画書を持ってカメラメーカーなどを回った時も、けんもほろろの対応だったといえます。「ある写真関係の団体に後援名義書という一種のステイタスをもらいに行きましたが、写真で金儲けしようとしていると言われて名義書をくれなかった。フォトフェスタ開催三年目

『写真甲子園』開催が転機となり町民の意識が高まる

若い人たちをターゲットに「写真甲子園」を開催

高校生たちによる全国写真コンテスト「写真甲子園」がスタートしたのは、平成六年の第十回「東川町フォトフェスタ」からです。そのきっかけとなったのは、写真雑誌の「CAPA(学習研究社)」

にやつともらえましたが、初めの頃はいろいろな障害がありましたね。最も難しかったのは、毎年継続させることでした。批判はありましたが、小さな町から情報を発信することに意義があると思ひ、職員総動員で取り組みました」と山森さん。そして十年目に転機がやってきました。

東川賞について



毎年、東川賞審査会が海外および日本全国から優れた活動を行う写真家を選んで各賞を授与。その写真家を東川町に招待して顕彰しています。その特徴の第一は、日本で初めての自治体による写真作家賞であること。第二は、日本の写真作家賞がすべて年度賞であるのに対し、国内と新人作家賞については作品発表から三年までを審査の対象とし、作品の再評価への対応に努めていること。そして第三は、日本で海外の写真家を定期的に顕彰しているのは東川賞のみで、あまり知られていない優れた海外作家を紹介してきたことです。

が主催していた「フォトオリンピア」という写真イベントでした。毎年そのフィールドに、東川町が使われていたのです。「この雑誌の読者は高校生です。そこで『東川町フォトフェスタ』の中で若い人たちをターゲットとしたコンテストをやろうということになり、高校生なので『写真甲子園』と命名したわけです」と語るのは、当



「写真、大好き！」 東川第一小学校の廊下にて、子供たちと写真絵日記

ボランティアスタッフとして住民も支援

住民たちの意識の盛り上がりは、スタッフとして関わる数の多さに表れています。「写真甲子園」では、一般公募、女性団体、地元の高中生、専門学校生や地元企業。「東川町フォトフェスタ」ではイベント運営を行う写真の町企画委員やホームステイボランティアの会。このほか、「東川町フォトフェスタ」と連動して実施する「どんとこい祭り」にも、町内企業や職場など多くの町民が関わり、期間中だけでもポ

ランティアは五百人を超え、数も年々増加しています。さらに「写真甲子園」や「東川町フォトフェスタ」のボランティアスタッフとして大学生などが三十名ほど駆けつけてくれます。「若い人たちは年をとって社会人になってもずっとつながっていきますから、イベント継続の大切なパワーになる。住民の意識アップとともに、若い人たちに『写真の町』を強くアピールしたことが、写真甲子園の大きな意義です」と、浜辺さんは熱く語ります。また、特別対策室長の山森さんも「今

時「写真の町企画委員会」の委員長を務めていた浜辺啓さん。浜辺さんは現在、東川町観光協会の会長でもあります。このコンテストは、全国の高校生を対象に、各校共同制作による作品を募集し、全国を八ブロックに分けて郵送応募による予選を行い、その中から優れた作品を寄せた十四校を選抜。選抜された各校三名の代表選手と顧問の先生を招待し、東川町・美瑛町・上富良野町の三町をフィールドに本戦大会を行うというものです。本戦は三日間で、三町の中で撮影した組写真を、各校が審査員を前にステージでプレゼンテーションします。審査委員長

は写真家の立木義浩氏。その他数名の審査委員が、公開で作品へのアドバイスをともに厳しい審査を行います。「第一回目は、全国六千校に参加を募りました。その時の参加校は百六十三校。年々盛り上がり、今年には二百二十四校が参加しました。本戦では高校生たちが町内に滞在して撮影などをするので、その時に住民たちとのふれあいが生まれるのです。カメラを持って町内を巡る若いパワーが、住民の写真への意識をぐんぐん高めてくれましたね」と浜辺さん。「写真甲子園」が、「写真の町」への住民の参加意識を目覚めさせたのです。

年でフォトフェスタも二十二回目になり、行政にも住民にも『写真の町』を推進していこうという気持ちが定着しました。暗中模索で歩んできましたが、とにかく継続できた。そして、フォトフェスタを実施することが当たり前となりました。現在、当初からの企画会社は外れ、行政と住民だけで協力し合いながら、町を盛り上げようと頑張っています」と話してくれました。「写真の町」を核とした成果とさらなる発展に向けた課題と展望

も多くの人が訪れ、様々な交流によって町に活気が生まれました。「東川賞」という国際写真賞の顕彰により、世界にも東川町の名が知られるようになりました。「成果3」数多くの優秀な写真作品は町の財産 毎年、「東川賞」受賞作家の作品は「東川コレクション」として町営の「東川町文化ギャラリー」に永久収蔵され、常設企画展などで町民や訪れる人々に公開されています。また町外の公共文化施設の展覧会、全国の美術館との写真展交流などにも活用され、町民の財産となっています。「成果4」各界から様々な賞を受賞 「写真の町」づくりのための数々の施策は、昭和六十一年に「第二回日本イベント大賞・特別賞」、昭和六十二年に「第一回農村アメリティコンクール・優秀賞」、平成二年に「日本写真協会・功労賞」、平成七年に「日本写真家協会賞」、平成十二年に「北海道地域文化選奨・特別賞」を受賞するなど、写

「写真の町」宣言や「東川町フォトフェスタ」開催後、しばらくは批判の声が上がったり無関心な住民が多くなりましたが、「写真甲子園」の開催を転機に住民の参加・協力意識が高まりました。また外部の人々との交流から、東川町民としての誇りも芽生えてきました。「成果2」交流人口の増加と町の知名度がアップ 「東川町フォトフェスタ」を中心に、日本全国や海外から

Success Story

東川町は米と工芸の名産地

東川町では、大雪山の自然が長年かけて創りあげた天然ミネラル水(地下水)を全家庭で生活用水として利用できます。そして、この名水と肥沃な大地、寒暖差の激しい気候から生まれる米は品質・食味ともに、北海道屈指の存在となっています。

また、豊かな森林資源から生み出された家具は全国で高く評価され、町の商店街に掲げられた木彫看板は、工芸の町の象徴とも言えます。近年では、家具づくりのノウハウを取り入れた個性的で感性豊かなクラフトグッズが、新しい工芸品として脚光を浴びています。



大雪旭岳源水を求めて、町外から訪れる人が後を絶たない



町内の商店街に掲げられる木彫看板が、なんとも東川町らしい



静かで広々とした田園風景に隣接した「優良田園住宅」

真界に限らず各界から認められ、高い評価を受けています。

課題と展望 未成熟な日本の写真文化

日本では写真文化というものがまだ未成熟で、他の文化と比べて軽視されがちなどころがあります。東川町としては、今後も各種のイベントや活動を通して、写真文化がきちんと位置付けされるよう支援していきたいと考えています。

課題と展望 文化ギャラリーの活用

「東川町文化ギャラリー」では収蔵している「東川賞」受賞作品などにより、随時写真

の企画展などを行っています。文化ギャラリーは敷居が高く敬遠されるなど、必ずしも有効活用できているとは言えません。たかさんの人が気軽に立ち寄り、もっと写真に興味を持ってもらえる方策を検討しています。

課題と展望 3 大学生・社会人対象のコンテスト



東川町 企画総務課 政策室 次長 杉山 昌次さん

たとえば全国の大学の写真部やサークルなどを対象とした「写真神宮大会」、社会人のクラブによる「写真後楽園」など、「写真甲子園」のような熱いコンテストを、各世代ごとに広げて展開できないかと考えています。

課題と展望 4 職員の異動問題

役場では職員の職場転換がつきものです。しかし毎年開催される「東川町フォトフェスタ」などの取り組みでは、町の担当者が数年で変わってしまうと、蓄積された人間関係や外部の業界に関する知識も

写真を切り口として 町民福祉の向上をめざします



東川町長 松岡 市郎さん

「いかに多くの人と会うかが、行政のポイントである」というのが私の持論です。多くの町民の方々、町内外の様々な団体・企業など、出会う人が多いほど新しい輪が広がり、新しいチャンスが生まれます。そしてそれを活用していくのが行政の仕事だと考え、元気ある職員が日々知恵を絞っています。

東川町が「写真の町」宣言をしてから二十二年。「東川町フォトフェスタ」などの活動を通して、町と外部との交流は活発になりました。それによって町の人たちは生き生きとしてきました。私も町長として様々な分野の方とお会いすることができました。これも「写真」という切り口のおかげであり、普通なら会えない人とも「写真」をきっかけに話し合う機会を持てたのです。現在では「写真の町・ひがしかわ」の名が全国的に知られるようになり、沖縄県の名護市や神奈川県相模原市などの自治体が視察にみえて、「写真」を切り口とした町おこしに取り組んでいます。また韓国の江原道からも視察にみえており、今後はイベントの連携も検討中です。さらに東京では「東川コレクション」の写真展を開催するなど、東川町はますます注目を集めており、改めて「写真」による効果を実感しています。

東川町では(1)繁栄(2)安心安全(3)幸福の実感をテーマに、町の活性化と町民福祉の向上に取り組んでいます。平成十七年には(財)電源地域振興センターの振興相談事業を活用し、データは「東川町集客型まちづくり方策基礎調査」としてまとめられました。そのデータを見ると、東川町がいかに美しい自然に恵まれ、交通アクセスも良く、周辺に医療などの諸施設が充実しているかがわかります。このような好条件をしっかりと見直し、「写真」によって生まれたチャンスを活用して、これからは生き生きと輝く町づくりをめざしてまいります。

に暮らす住民の方々の中から「美しい風景づくり指導員」を任命して、月に四回、エリアを巡って乱開発やゴミ投棄を監視するパトロールを開始しました」と語るのは、企画総務課政策室次長の杉山昌次さん。同じく平成十四年には、景観づくりに貢献した人を表彰する「美しい風景づくり賞」もスタート。そして平成十七年には、仙台以北で東川町は、国の景観法に基づく「景観行政団体」の第一号に認定されました。

東川町ならではの街並・住宅づくりを推進

東川町では、市街の花壇の

植栽、企業用地の緑化などから、住宅の屋根や壁の色に至るまで、街の景観に気が配られています。街並・住宅づくりについて、産業振興課長の長原淳さんはこう話してくれました。「これは移住や定住のための支援策でもあるのですが、個人の住宅を新築する際、配置や屋根形状、外壁の色など



東川町 産業振興課 課長 長原 淳さん

一定条件を満たす場合、カーポートなど付属建物の建築費に五十万円を補助しています。また東川町産の家具を二十万円分補助しています。町ではさらに、民間業者がアパートを新築する場合に二戸当たり百八十万円の助成金を出す制度や、町が認定して民間業者が造成・建築する「優良田園住宅」という新住宅エリアを設けるなど、移住や定住化に積極的に取り組んでいます。

「すでに六十人近くが関東や関西から来て、優良田園住宅に定住しています。しかもその四割は若い世代。東川町は

大雪山からの天然ミネラル水を全世帯地下水で取水できるため、子育てに優しい環境であること認識していただいているのです。」

五十年先を見据えた美しく元氣ある町づくり

写真を切り口とした東川町のまちおこしは、人口が何千人増えたとか、経済効果は何億円だとか、従来のように数字を基準に言い表すことはできませんが、「写真の町」宣言からすでに二十年以上経ち、進行していた過疎化からは確実に脱却しました。住民の町に対する愛着や誇り、町全体の活気や輝きなど、むしろ数

字で計れないところに本当の効果が表れているようです。「外の人々との交流の広がり、美しい景観や環境づくりは、これから三十年、五十年先にもますます輝きを増してくると思います。本当に恩恵を受けてるのは自分たちではなく、子供たちの世代なのだという息の長い取り組みが『写真の町』ではないでしょうか。そんな意識でこれからも自信を持って活動を続けていきます」と杉山さんと長原さんは口をそろえます。

大雪山からこんこんと湧き出る水同様、東川町では今日もまちおこしのアイデアが枯れることはありません。

電気のふるさと
産品自慢

富有柿ジャム

岐阜県
本巣市

本巣市は、岐阜県の南西部、福井県との県境にある能郷白山から南へ縦長に位置し、自然と人が共生し、快適で心ふれあうまちです。

本市は柿、イチゴ、水稲を主要農作物としており、なかでも富有柿は、全国的にも一大産地として知られ、明治時代から栽培されている特産品です。岐阜県が原産地で、

実が大きくて甘く、「柿が赤くなれば医者青くなる」と言われるほど栄養たっぷりです。

市には、柿の文化を広めようと



富有柿ジャムセット

お問い合わせはこちら

・本巣市富有柿の里 富有柿センター
TEL: 058-323-4511

・フルーツ工房糸貫 代表 高橋
TEL: 058-324-0717

「古墳と柿の館」があり、ここでは柿の歴史や品種、柿を呼んだ歌や物語、諺などについて触れることができるほか、大正時代から昭和三十年頃までの農家の暮らしぶりや柿栽培に使われた農機具などを見ることができます。

また、「富有柿をそのまま食べるのもおいしいけど、加工するとまた違ったおいしさが味わえる」ことも知ってもらいたいと、柿を利用した加工品の数々を販売しています。

なかでも、「富有柿ジャム」は、十数年前、柿農家の主婦が集まって、試行錯誤の結果生まれた逸品です。富有柿とグラニュー糖、レモン汁以外は、何も添加しておらず、自然食品そのもの。富有柿とレモンの風味がマッチして、パンやヨーグルト、クッキーなどによく合います。手作りで、しかも癖の無さと珍しさから大好評です。ぜひ一度ご賞味あれ!

電気のふるさと
産品自慢

しこくまい
紫黒米あれこれ

兵庫県
たつの市

平成十七年十月の合併により誕生したたつの市は、播州平野南西部に位置し、北側には山地が広がり、南側は瀬戸内海に面し、南北に貫く形で清流揖保川が流れており、自然環境に恵まれています。

市の特産品である紫黒米は、平成十一年から揖西・神岡地区で生産されています。この紫黒米の濃い紫色には、高い抗酸化性をもつアントシアニンが含まれており、視力改善や老化防止に効果があると言われてます。

白米一合に対し紫黒米大さじ一杯程度入れると「おこわ」に大変身、赤飯のような色味食感が味わえます。

また、紫黒米を原料とした加工品の研究開発が進んでおり、現在では、素麺や寿司、うどん、甘酒、味噌、和菓子、洋菓子、パン、清酒、健康酢などといった十五種類を販売しています。



紫黒米健康酢

お問い合わせはこちら

・たつの市産業部農林水産課 (販売所) 龍野観光売店「さくら路」
TEL: 0791-64-3157 TEL: 0791-63-9456

〈販売所〉国民宿舍赤とんぼ荘 (販売所) 龍野駅前観光案内所
TEL: 0791-62-1266 TEL: 0791-63-9955

特に紫黒米健康酢は、平成十七年度に農林水産省主催の優良ふるさと食品中央コンクールで「農林水産省総合食料局長賞」を受賞しました。

この紫黒米健康酢は、甘味料無添加で伝統の発酵技術により天然クエン酸を多く含み、一般の食酢よりもまるやかで飲みやすい健康酢として親しまれています。

なお、紫黒米、紫黒米素麺、紫黒米健康酢は地方発送できます。お立ち寄りの際には、ぜひお求めください。



紫黒米が練りこまれたパン

愛媛

みんな、伊方へ来なはいや。～特産品がいっぱい「きははいや伊方まつり」～
愛媛県 伊方町

伊方町は、四国の最西端、九州に突き出た「日本一細長い半島」と言われる佐田岬半島に位置し、平成17年4月に、旧三崎、瀬戸、伊方の三つの町が合併し、新しい伊方町として誕生しました。

九州との間に広がる豊予海峡で水揚げされる「岬アジ・岬サバ」、半島特有の段々畑で、陽の光をいっぱい浴び、風味豊かに育ったさつまいも「瀬戸金太郎いも」、柑橘王国である愛媛の中でも名産地として知られる「清見タンゴール、温室みかん」等、合併により自慢できる特産品が益々充実してきました。

7月29日から3日間にわたり行われた「きははいや伊方まつり2006」



オープニングセレモニーの風景(伊方堂々太鼓ジュニアの演奏)

「きははいや伊方まつり」は、旧伊方町の時代から数えて、今年で17回目となり、今では、自分達で作り上げた真夏の元気なイベントとして広く認知されています。

中でも、「杜氏の里の酒まつりと食の祭典」は、伊方の郷土料理を肴に、伊方町が誇る歴史ある「伊方杜氏」が丹誠込めて醸し出した自慢の酒が、無料で味わえるということで、根強いファンに支持され続けています。

この他にも、アジ、タイ、ヒラメ等の活魚のつかみどり、和太鼓の競演、こどもすもう大会、姉妹都市北海道泊村の物産販売、電力会社の協力によるキャラクターショー等々、例年の猛暑の中、子供からお年寄りまで、来場者の期待を裏切らない盛りだくさんの催しで盛り上がりました。

(電源立地地域対策交付金活用事業)

お問合せ先
伊方町 商工観光課
TEL 0894-38-0211

福井

若狭おおいのスーパー大火勢
～新しい町の伝統づくりと地域の活性化をめざして～
福井県 おおい町

おおい町は、県の南西部に位置し、平成18年3月3日、大飯町と名田庄村が合併して誕生した人口約9千人の町です。

昔この地では、若狭湾の海水を焚き、塩を都へ送っていたと伝えられています。その火



舞い散る火の粉を振り払いながら回転する大火勢。場内の熱気は最高潮に

その「火」を絶やすことなく未来へ伝え、さらに、新しい「おおい町」の伝統づくりと地域の活性化をめざして、今年で12回目となる「若狭おおいスーパー大火勢」が8月5日に行われました。このスーパー大火勢は、高さ20メートル、重さ1トンの木の葉型の燃え上がる大松明を、若衆が「ヤッサー、ヤッサー」という勇ましい掛け声に合わせて回転させます。闇夜に浮かび上がる炎の輪はとても力強く、幻想的な風景です。

この祭りは町民参加型のイベントとして開かれ、実行委員会(有志)によって企画・運営されます。準備は、松明材料(カヤ)の用意など、祭りの半年前から始まります。祭り当日には、町全体が多くの人で賑わい活気づきます。

お問合せ先
おおい町 企画課
TEL 0770-77-1111

いきいき電源地域

地域振興に取り組んでいる電源地域の元気な姿を紹介いたします

「電気のふるさと」電源地域ニュースでは、電源地域のさまざまな取り組みを紹介しています。このコーナーでは、読者の皆様からお寄せいただいたご意見・ご要望を積極的に誌面に反映させて参りますので、皆様の地域で取り組んでおられる事業や施策をどしどしお寄せください。巻末にご意見・ご感想も活用ください。心よりお待ちしております。

販売支援事業

「電気ふるさとじまん市」が ネットモールに出店します！

「電気ふるさとじまん市」のネットモール出店に係るお問い合わせ先は、
(財)電源地域振興センター 販売支援課
電話：03-5405-8119
e-mail：msp@div.dengen.or.jp ㊟

電気ふるさとじまん市 in bidders

電源地域市町村の方々のみならず、首都圏の消費者の方々からも高い評価をいただいております。「電気ふるさとじまん市」ですが、諸般の事情により本年度は開催しないこととなっております。

でもホームページを立ち上げたり、モールの出店されたりと積極的に取り組まれている方もいらっしゃると思いますが、パソコンの扱いに不慣れだったり、高速回線が未整備だったり、なかなか取り掛かれない事業者の方も多いのではないのでしょうか。そこで、当センターでは、「電気ふるさとじまん市」の店舗をネットモール大手の「ビidders」に出店し、センターが中心となって、電源地域の特産品や名産品をネットモールの販売することとしました。



一ヶ月420万人が訪れる! biddersサイト

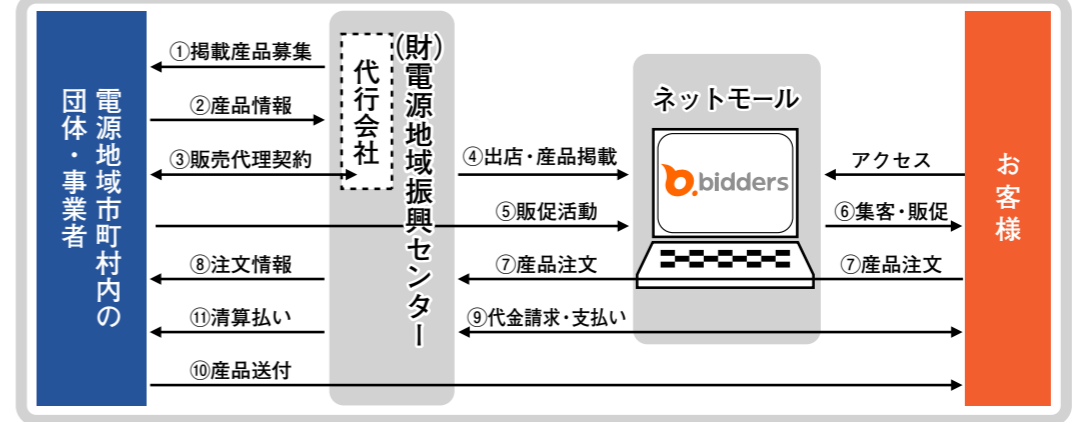
「Yahoo! JAPAN」に次ぐ業界三位のネットモール事業者であり、一日一六〇〇万ものページビューがあります。また、センターが中心となって運営するため、電子メールのやり取りができれば、特段のパソコン技術がなくても出品・購入することができます。

今年度は試験的な実施ととらえ、一〇〇社三〇〇産品程度の参加を見込んで募集をいたしました。予想を遙かに超えるおよそ一六〇社六〇〇産品の申込がありました。これは電源地域市町村の方々の「じまん市」への高い評価と期待の裏返しであると事務局職員一同、気持ちを新たにしております。

モール店舗は、年末のお歳暮商戦に間に合わせるため、十一月初めの開店を目指して、鋭意準備作業中です。開店にあたりましては当センターのホームページ等でもご案内をいたしますので、是非一度お立ち寄り頂き、電源地域のじまんの産品をお買い上げください。

本件事業の今年度の申込につきましては、すでに締め切らせて頂いておりますので、ご了承ください。

ネットモールにおける販売の流れ



人材育成事業

あなたの地域の担い手づくり 最近の研修事業から

今回は本年七月十九日(水)・二十日(木)に当センターで行われました研修 No.11「ツーリズムによる地域活性化事例を学ぶ」のプログラムとその中から、初日の講義要旨をご紹介します。

本研修では、はじめに東洋大学の青木辰司教授による基調講演があり、続いて、日本のグリーンツーリズムの先進事例として、

- ①北海道深川市 谷口歩会夢(ファーム) 代表、元気村・夢の農村塾塾長 谷口 保幸氏
- ②秋田県仙北市西木町 農家民宿 泰山堂 藤井 けい子氏
- ③熊本県人吉市 ひまわり亭 本田 節氏
- ④大分県宇佐市 安心院支所 商工歓交課 グリーンツーリズム推進係 係長 河野 洋一氏

と、各方面からお招きした担当講師による事例紹介がありました。当日は、全国の電源市町村から十三名の参加があり、公演後の情報交流会など、大変実りの多い研修が実施されました。



東洋大学社会学部 教授 青木 辰司氏

【講義】ツーリズムの現状と課題―日英比較を通して―

東洋大学社会学部 教授 青木 辰司氏

■グリーン・ツーリズムについて

グリーン・ツーリズムとは、「緑豊かな農山漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」というのが農林水産省の定義です。都市側には余暇活動のニーズや自然回帰志向がある一方、農山漁村側には地域おこしのニーズがあり、双方のかけ橋になるのが、「グリーン・ツーリズム」です。マスツーリズムに見られるような通過型の観光ではなく、地域に根付いた地域資源や住人との交流を通じて、田舎暮らしに触れる滞在型を目的としています。グリーン・ツーリズムは単なる「観光」ではなく、また、

野菜を採ったり、蕎麦を打ったりという農業体験だけでもありません。それだけに行政本位の体制では難しく、民間の力をはじめ、最近では、女性の細やかで温かい心配りが注目されています。

■イギリスのグリーン・ツーリズム

次にグリーン・ツーリズムの先進国であるイギリスの取り組みを紹介します。イギリスでは、散歩を楽しむ文化やガーデニングを愛する文化があり、イギリス人の大半は、カントリーサイドで暮らすことを夢見ています。この志向は、比較的裕福な人々が静寂で美しい田園地域を移住地として選択したり、余暇時間の増大によって、グリーン・ツーリズムの社会需要が拡大していったことが原因と言われています。

【イギリス型グリーン・ツーリズムの特質】

- ・小規模民宿は、営業許可取得が容易であるため、空き部屋をB&B民宿(朝食付民宿)として比較的容易に営業できる。
- ・パブ(地方の交流空間としての居酒屋)の整備・充実により、B&B方式の農家民宿が成立しやすい相補性がある。

・私的財産を公共的利活用する意識が高いため、一般の田園地帯にも牧草地の間を自由に散歩できる公共遊歩道が普及している。

・質の確保について、等級制度を導入している。

・静寂で美しい景観、清浄な空気や水といった環境保全への配慮の高さが伺える。

■日本型グリーン・ツーリズムの課題

日本全国各地の農家民宿やワーキングホリデーなどを取り入れた多くの実践地では、行政が果たす役割が非常に大きいと思われる。立ち上げ段階で、行政が主体となって啓発・普及に努め、主体的な実践者を幅広く集めます。それを地域全体(行政、議会、地域組織、各種団体等)で支援する体制や制度を作ることが肝要です。そして、ある程度住民の主体的な実践が、組織的なものになった時点で、後方支援の推進が日本のグリーン・ツーリズムの推進にとって、現実的な実効を有していると言えます。

「エネルギープラザ2006 in 玄海町」開催のお知らせ

平成十八年十月三十一日(火)から十一月二日(木)までの三日間、佐賀県玄海町において「エネルギープラザ2006 in 玄海町(主催:玄海町、経済産業省 後援:佐賀県、唐津市 実施主体:財)電源地域振興センター」を開催します。

プログラムは、初日に開会式と講演会、交流会(交流会は玄海町と電源地域振興センターの共催)を、二日目は地域振興事業検討会・分科会を、三日目は玄海原子力発電所や三法交付金施設を巡る実地研修を行います。

二日目の地域振興事業検討会・分科会では、「地域資源開発」「地域経営戦略」といった切り口から電源地域の今日的課題を考えます。また、「玄海町をケースと

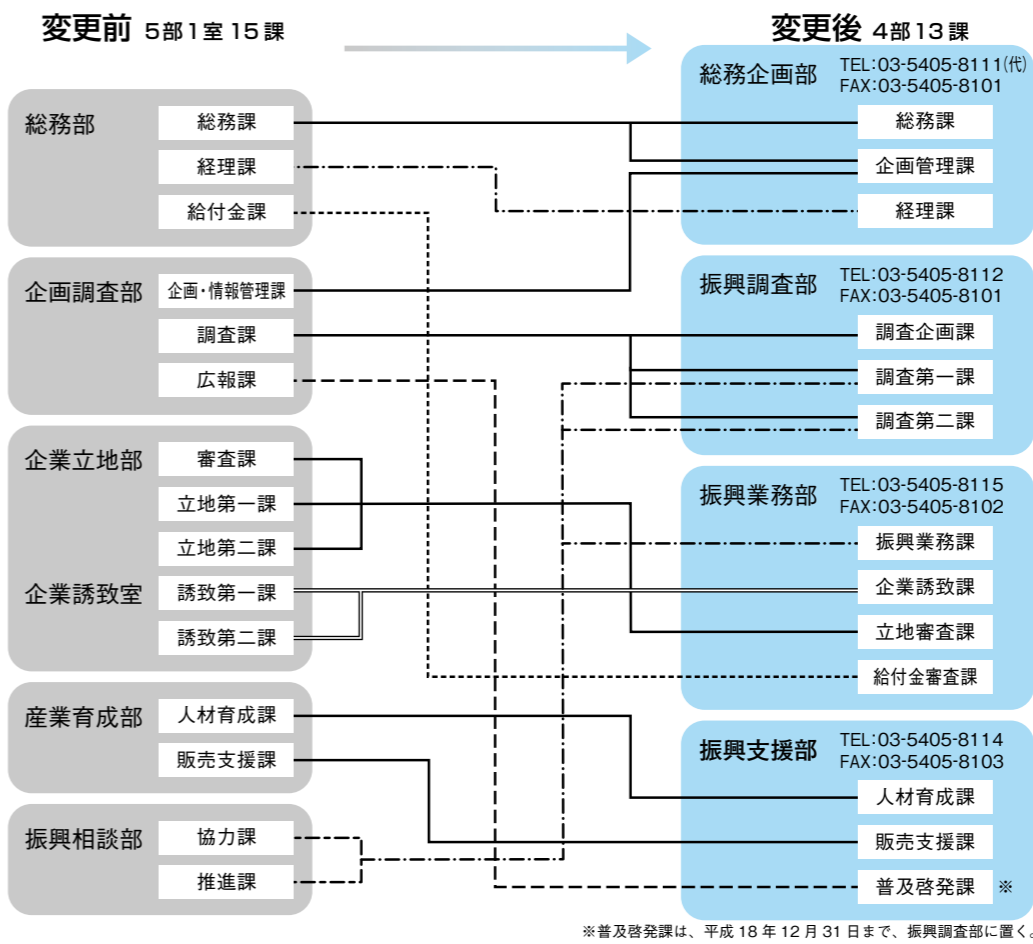


玄海町 浜野浦の棚田(佐賀県 伊万里市 徳田武久さん撮影)

■お問い合わせ先
 (財)電源地域振興センター 普及啓発課
 電話:03-5405-8112
 e-mail:kouhou@div.dengen.or.jp
 まで

(財)電源地域振興センターの組織が変わりました

当センターは、平成十八年七月一日に組織改編をいたしました。新しい体制と連絡先は左図のとおりです。



※普及啓発課は、平成18年12月31日まで、振興調査部に置く。

from the Center

人事往来

経済産業省(平成18年6月～平成18年7月分)抄			
◆平成18年6月5日付			
氏名	(新)	(旧)	
鈴木 洋一郎	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課 原子力発電立地企画官 兼原子力発電立地対策・広報室長	大臣官房付	
岡野 克弥	経済産業政策局地方調整室長	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課 原子力発電立地企画官 兼原子力発電立地対策・広報室長	
◆平成18年6月29日付			
氏名	(新)	(旧)	
鎌倉 正次	中部経済産業局電力・ガス事業 北陸支局長	大臣官房会計課監査官	
笠原 彰	大臣官房付・辞職	中部経済産業局電力・ガス事業 北陸支局長	
◆平成18年6月30日付			
氏名	(新)	(旧)	
岡安 賢二	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課 原子力広報官 兼原子力発電立地対策・広報室付	資源エネルギー庁省エネルギー・新エネルギー部 省エネルギー対策課長補佐	
畑中 耕一	辞職	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課 原子力広報官 兼原子力発電立地対策・広報室付	
◆平成18年7月10日付			
氏名	(新)	(旧)	
望月 晴文	資源エネルギー庁長官	中小企業庁長官	
小平 信因	辞職	資源エネルギー庁長官	
平工 奉文	資源エネルギー庁次長	製造産業局次長	
細野 哲弘	製造産業局長	資源エネルギー庁次長	
舟木 隆	資源エネルギー庁電力・ガス事業部長	大臣官房審議官(経済産業政策局担当)	
安達 健祐	大臣官房総括審議官	資源エネルギー庁電力・ガス事業部長	
生越 晴茂	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 電力基盤整備課 電力流通対策室長	九州経済産業局総務企画部総務課長	
岩野 宏	製造産業局非鉄金属課長	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 電力基盤整備課 電力流通対策室長 産業技術環境局大学連携推進課長	
中西 宏典	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課長	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課長	
櫻田 道夫	産業技術環境局基準認証政策課長	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課長 特許庁総務部総務課長補佐	
波留 静哉	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課 核燃料サイクル産業立地対策室長	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課 核燃料サイクル産業立地対策室長	
鎌田 光治	四国経済産業局産業部長	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課 核燃料サイクル産業立地対策室長	
久貝 卓	近畿経済産業局長	大臣官房会計課長	
	同局総務企画部長に併任		

経済産業省(平成18年6月～平成18年7月分)抄			
◆平成18年7月10日付			
氏名	(新)	(旧)	
福水 健文	大臣官房地域経済産業審議官	近畿経済産業局長	
長谷川 英一	東北経済産業局長	経済産業政策局地域技術課長	
本部 和彦	大臣官房審議官(エネルギー・環境・国際博覧会担当)	東北経済産業局長	
宮下 英治	中国経済産業局長	貿易経済協力局貿易管理部 貿易管理課長	
奥村 和夫	大臣官房付	中国経済産業局長	
深野 弘行	北海道経済産業局長	大臣官房審議官(地球環境問題担当)	
内山 俊一	製造産業局次長	北海道経済産業局長	
脇本 真也	関東経済産業局長	特許庁審査業務部長	
高橋 武秀	大臣官房付・辞職	関東経済産業局長	
川口 修	九州経済産業局長	中小企業庁長官官房参事官	
松井 哲夫	中小企業庁経営支援部長	九州経済産業局長	
◆平成18年7月31日付			
氏名	(新)	(旧)	
和田 真佐人	資源エネルギー庁電力・ガス事業部 原子力立地・核燃料サイクル産業課 原子力地域広報対策室長	防衛施設庁施設部施設企画課付	

【読者プレゼント】
 今号の「電源地域のサクセスストーリー」でご紹介した北海道東川町のご厚意により、「東川産米缶 ほしのゆめ」を五名様にプレゼントいたします。とじ込みのアンケートハガキに本紙へのご意見・ご感想などをご記入の上、十月二十日(消印有効)までにお送りください。なお、当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。



【編集後記】
 地域振興の成功のポイントの一つに、「地域の利点や資源を分析し活用すること」があげられます。今号でご紹介した北海道東川町は、大雪山国立公園というすばらしい景観を資源と捉え、大衆性と芸術性を兼ね備えた写真を切り口として、写真文化による町づくり、生活づくり、人づくりを目指しました。文化を育む取り組みは、継続が大切です。町長以下皆さんの様々な継続の努力が今日の「写真の町」東川町を作り上げたのです。本誌では皆様の地域振興に係る取り組みに少しでもヒントになるような事例を今後とも継続してお伝えしていけるよう努力していきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。(S)



本紙の取材にご協力いただきました東川町の方々ありがとうございました。

財団法人 電源地域振興センター

〒105-0013 東京都港区浜松町一丁目18番16号 住友浜松町ビル6階
TEL 03-5405-8111 (代表) URL <http://www.dengen.or.jp/>

(本冊子は再生紙を使用しています)

読者の皆様からのご意見・ご感想を反映したいと思います
アンケートにご協力をお願いします